

私の記憶「鍵」になる

本人認証新システム

大田のベンチャー

自分の記憶が「鍵」になる……。そんなユニークな本人認証技術を使ったセキュリティシステムを大田区のベンチャー企業が開発した。思い出の写真を連想ゲームのように組み合わせるパスワードにするため、他人に分かりにくく、忘れにくいのが特長。入退室管理や現金自動出入機（ATM）など、幅広い需要を見込んでいる。

港区北青山のTEPIA
Aプラザで10日始まった
「e-ライフ展」生活産
業の新技术」の一角。

犬、メガネなど12枚の画像パネルの前で、「SK Rテクノロジー」（大田区本羽田）の関本明史社

長(50)が説明する。

「子どものころ追いかけたチョウ、学生時代に通ったコーヒーショップ、大人になってあこがれた山手線。12枚の中から、事前に登録した思い出の画像だけを、時代順に2回繰り返し押すのが私のパスワードなんです」

数字の代わりに画像を

選ぶ認証技術に関本さんが出合ったのは2年前。液晶製造装置メーカーを辞め、起業した直後に出かけた展示会だった。当時販売していたのは、特殊なフィルムを通さないと画像が見えない液晶ディスプレイ。この二つを組み合わせれば、高度なセキュリティシステムができる」とひらめいた。

早速、開発元のニモニックセキュリティ（大阪市）と提携し、商品開発に着手。記憶を使った認証と盗み見防止の特殊ディスプレイに、JRの「Suica（スイカ）」のような、非接触型のICカードを組み合わせたシステムを考案し

た。社員が2人しかいないため、昔の同僚にも協力を呼びかけ、入退室用と金融機関向けの試作機を作った。

安全性のポイントは三つ。まず、読みとり機にICカードをかざさないと認証システムは起動しない。さらに、同じカードに組み込まれた特殊フィルムを通してしか、画面に呼び出された画像パネルが見えない。その上で、登録しておいた思い出の画像を順番通りに押さないと、本人と認証されないというわけだ。

他人が当てずっぽうで押した場合すぐに画面が消え、選んだ画像が正しくても順番や押す回数

が違ふなど、本人が犯しやすい間違いならやり直せる。おとり画像の中に、押すと警備に通報がいく1枚を組み込み、脅された場合でも不審がられずに危険を知らせる機能も持たせた。

大田区の新製品・新技術コンクールで賞を受けたほか、都のベンチャー技術大賞にノミネートされたこともあり、「すでに複数の企業から問い合わせが来ている」と関本さん。画像を登録する手間や、特殊カードのコストなど、実用化にはまだ課題が残るが、「改良を進めれば、指紋や静脈などの生体認証にも対抗できる」と期待している。

保存会に委託されて10年前から撮影を続けている。深夜に大綱を運び込み安全祈願する人々や、巨大な綱に群がる人々や

長(50)が説明する。「子どものころ追いかけたチョウ、学生時代に通ったコーヒーショップ、大人になってあこがれた山手線。12枚の中から、事前に登録した思い出の画像だけを、時代順に2回繰り返し押すのが私のパスワードなんです」

思い出の画像 順番に押すだけ



関口さんが考案した金融機関向けのセキュリティシステム



「どんな画像を登録したかは、家族にも教えないください」と関口さん＝港区北青山のTEPIAプラザで

カメラで追う

「那覇大綱挽」

銀座で写真展

沖縄の秋の風物詩「那覇大綱挽」を撮り続けている写真家、安里盛昭さん(63)の写真展が、中央区銀座の富士フォトサロンで10日から始まった。写真。

長さ約200m、重さ約40tもの綱を約1万5



保存会に委託されて10年前から撮影を続けている。深夜に大綱を運び込み安全祈願する人々や、巨大な綱に群がる人々や